

建築資材を扱った企業によって戦後刊行された雑誌の特徴とその比較
- 『カラム』『SPACE MODULATOR』『a/a』を対象として -
**FEATURES OF THE MAGAZINES PUBLISHED AFTER THE WORLD WAR II BY
COMPANIES DEALING WITH BUILDING MATERIALS AND ITS COMPARISON
- FOCUSING ON “COLUMN”, “SPACE MODULATOR” AND “a/a” -**

建築デザイン分野 奥田竜生
Architectural Design Ryusei OKUDA

建築資材を扱った企業によって刊行された雑誌の概要を捉えることで、特徴が明らかとなった。既往研究で語られるような自社製品の宣伝といった部分は確認できた。同時に建材会社として技術を社会に発信する事に対する使命感が見受けられた。三誌の相違点は、当時の建築界に対する問題意識及び各建材の建築物への関わりの違いによるものと考えられた。企業誌をみていくことで、建材会社を単なる技術の提供者ではなく、技術思想をもった存在として捉えることができた。

The feature became clear by catching the outline of the magazine which was issued by the enterprise which handled building material. The part such as advertisement of the in-house product told by the past study could be confirmed, but the sense of mission to send technology to society as a building material company could be confirmed at the same time. I could think a point of difference of three magazine depends on difference about problem consciousness to the construction world and concerning to a building of each building material in those days. It was possible to catch a building material company as existence with a technological thought, not a just technological provider by seeing an enterprise magazine.

1. はじめに

1-1 背景と目的

我が国においてこれまで刊行されてきた建築を題材とした雑誌（以下、建築雑誌）は多岐に及んでおり、その歴史は明治期にまで遡る事ができる。『建築雑誌』や『関西建築協会雑誌』（現：『建築と社会』）などの雑誌は、建築を学術的視点で追う上で有用なものとしてされる。また、『建築新潮』や『新建築』など建築専門出版社によるものは、商業雑誌として一般大衆にも受け入れられている。雑誌の性格こそ異なるが、これらの建築雑誌は、即時的に建築界の様を反映し、長期的に刊行されてきたという点から、ともに資料として有用なものであると言えよう。

1960年代に建築資材を扱った企業によって相次いで刊行された建築雑誌がある（以下、企業誌）。日本板硝子株式会社による『SPACE MODULATOR』、八幡製鐵による『カラム』さらに軽金属協会による『a/a』などである。これまで語られてこなかった企業誌であるが、学術的な建築雑誌や商業的な建築雑誌とは異なる部分が確認できる。

一つ目は、建材会社という建築業界の基盤を支え企業が刊行している点である。高度経済成長期という技術革新によって建築界が活況を呈した時代に、建材会社がどのような思想を持ち合わせていたのか

を確認できる意味は大きいと考えられる。

二つ目は、扱われる対象が広範かつ多様である事である。建築という型にはまらず、インテリアから都市に至るまで広範囲に問題設定を設けており、横断的に当時の建築界の様相を窺う事ができる。また、有名建築家の影に隠れる傾向にあった若手の論考や世界的な建築家らの思想も確認することもできる。

しかし、これまでの建築雑誌の研究においては概要しか示されていないにもかかわらず、PR誌と称され自社製品を広告する刊行物として認識されてきた。さらに、発行元である建材会社に対しても、商業主義の延長で、建材の規格化によって大量生産に専念していたものとして捉えられる傾向がある。

そこで、企業誌の特徴を明らかにすることで、建築雑誌として正当な評価を行なう事を本研究の目的とする。そして建材会社の社会的な位置づけに関して考察を行う事とする。

1-2 研究の位置づけ

建築雑誌を対象とした研究は、雑誌が建築界にもたらした影響を考慮すると十分な研究がなされている分野とは言いがたい。その中で、本研究で取り上げた三誌を扱っている既往研究¹がある。これは、明治初期からの建築・都市・住宅関係雑誌のうち主要なものについての創刊年と変遷を体系的に調べたものである。戦後

誌において割愛しているものもあるが、団体協会誌、社報までを含めて調査しており、これまで出版されてきた建築雑誌の全貌を把握する上で大変意義深い研究であると言える。しかし、雑誌内容についてはふれておらず、本研究の対象とした三誌をPR誌として捉えた根拠に乏しい点も見受けられた。そのため、本研究では概要のみならず、特徴を導くことで三誌の雑誌としての実態を探るという点で新規性があるといえる。

2. 『カラム』について

2-1 雑誌概要

雑誌『カラム』は、八幡製鐵の社内に設けられた八幡製鐵株式会社内カラム刊行委員会によって編集され、株式会社鉄鋼と金属社が製作と販売を手がけた建築雑誌である。1962年に発刊され、1990年の117号をもって廃刊に至っている。季刊誌として発刊されており、おおむね年に4度の頻度で出版されていた。寄稿者の属性は、有名大学の教授が多い傾向がみられ、専門分野は建築構造であった。

2-2 創刊の経緯

(前略) 土木、建築界と鉄鋼業は互いに唇齒輔車の関係のうちに発達して参りましたが、この関係は両業界の盛んな技術の開発によつて、今後、益々密接になるものと考えます／こうした時期に際し、土木、建築界に奉仕する鉄鋼メーカーとして、弊社では、両業界の相互理解を深める共通の広場を持ちたいと考え、社内に雑誌発行の組織をつくり、誌名を「カラム」と名づけて発刊することになりました²(以下略。「／」は改行)

土木建築分野の両業界の技術者を結びつける存在として創刊された本誌の名前の由来は、柱が古代から構造主要部としての役割があったとした上で、本誌が扱う鉄鋼を合理性の象徴として捉えている事であった。

2-3 雑誌の体裁について

創刊号から表紙と目次の変遷を辿ると、表紙にみられる誌名の表記が変化するという変更点は確認できた。これらは、その号だけみられる単独な変化として捉える事ができた。まとめりとしての変化が確認できたのは、32号(1969年)以降であった。この号から、表紙と目次との関連性が直接的に確認できないものが相対的に増えた。

2-4 連載について

連載「建築の工業生産化と八幡 MONO-H 構法」³は、高層建築における従来の建築構法が、経済的な構法ではないと指摘した上で、八幡製鐵が独自に開発した新構法に関して、骨組み計画や耐火性能及び工期面での優位性を、実験データに基づいて論証したものであった。PR的な存在であると同時に構造的合理性に基づいた提案としても捉えることができた。

2-5 特集について

本誌は、一貫して技術に関する論考で構成されているが、特集⁴を追うことで「超高層」に関係する技術が重要であると判明した。本誌で扱われる技術には変化が確認でき、それぞれ「未来を語る上での技術」「現在化に向けた技術」「課題に対応する技術」に分類できた。

2-6 雑誌の時代区分

本誌は、構造系の研究者が中心となって技術を扱う企業誌として一貫性が確認できた。そして、技術者同士をつなげる事が、本誌の創刊経緯であった。また、雑誌内で取り上げられた技術は超高層に関連するものが多く確認でき、時代毎に異なる姿勢が確認できた。以下に、時代区分し、解説を行なう。(図1)

■第Ⅰ期：1962年～1966年

グロピウスの論考⁵に象徴されるように「国際性」という側面を確認することができた。日本における土木建築分野の技術者に対してだけではなく、海外における両分野の技術者へといった性格が確認できた。この際、英文と和文とを対訳させるという手法をとっていた。また、扱われている技術は、特集にみられるような「未来を語る上での技術」であり、これは「超高層」に関するものであった。

■第Ⅱ期：1966年～1969年

実験的に技術を扱っており、超高層に関するものが多い傾向みられる。これは、建築基準法の改正にともない我が国において超高層建築が可能となった事に由来すると推測される。ここで扱われる技術は、「現実化に向けた技術」であった。

■第Ⅲ期：1970年～1975年

実験的に技術を扱っているという性格を引き継いでいるが、扱われている技術が多少異なる。ここでの技術は、超高層が実現したことによって見えてきた「課題に対応する技術」である。

3. 『SPACE MODULATOR』について

3-1 雑誌概要

雑誌『SPACE MODULATOR』は、大阪に本社をおく日本板硝子株式会社が発行していた建築雑誌である。日本板硝子は、1917年に日本ではじめて普通板硝子を大量生産方式で製造することに成功した会社で、総合板硝子メーカーとして中心的な存在であると言えよう。この雑誌は、1960年から始まり現在も出版が続いている(2015年現在)。編集者は、創刊当時は森田正敏(1号・1960年から13号1963年)、堀木宗詮(14号・1963年から32号・1968年)、白山武(33号・1969年から49号・1977年)途中井上喬雄(46、47号)、明石英三(50号・1977年)、大塚薫(51号・1978年から54号・1979年)といった変遷を辿っており、70年代後半から編集者が度々変わっている事が確認できる。中心的寄

稿者には、偏りはなく建築家、建築評論家、造形家など多様な属性が確認できた。

3-2 創刊の経緯

閲覧できた資料の関係から創刊の経緯については不明であるが誌名の由来については分かった。

本誌の題名、Space は空間・時間・宇宙を、Modulator は調整・制御するもの、または人を意味し、人類の生活環境のなかでのガラスの役割を象徴するものとして名づけられました⁶

時間や人間を含めた意味で空間を捉えた上で、それを制御するものとして建築をとらえているものと考えられた。ガラスが人を起点として建築や都市に広がりを見せるものとして捉えていると推察された。

3-3 雑誌の体裁について

細かな変更は幾つか確認することができたが変化として連続的に捉えることのできる表紙の変容は、しばられる。候補としては、撮影者が二川幸夫氏以外の担当が増えはじめる 1963 年あたりのも、1969 年 35 号から確認できた目次の英語表記化、目次構成の大幅な変更が確認できた 1971 年 41 号が挙げられる。

また、特集で使われたテーマが表紙で起用される事から、特集と表紙の関連性が強い傾向にある事が判明した。

3-4 連載について

最も長期的な連載「製品紹介」⁷は、雑誌後方に位置し、日本板硝子が手がけたガラス製品の実例を交えた紹介で、PR 的性格の連載であった。「GLASS SCIENCE」

⁸などの連載からは、歴史的事実を示した上で、今日的なガラスの意味を探るといった編集方針が確認できた。

3-5 特集について

連載同様、本質からガラスを捉え直す姿勢が確認できた。1964 年の特集「把手」では剣持勇の論考⁹が確認できた。末端と表現される建築の細部へのこだわりは、工業化が進む時代の裏返しとしてあったと推察される。そして、建築で使用されるより前に、ガラスが工芸製品として使用されていたという事がこのような特集のくまれ方と歴史の見地から本質を探るといった編集方針に関係していると考えられる。

3-6 雑誌の時代区分

本誌は、ガラスを人間に近い存在として捉えていることが誌名の由来で、編集方針にもこの姿勢を確認する事ができた。連載や特集では、材料としてのガラスが「建築」「プロダクト」「都市」「環境」という領域で語られていく。また PR 誌である事を認めながらも、新しい PR 誌の形を模索していた。これは、建築雑誌でありながら建築扱わない特集を組むなど斬新な編集方針として確認できた。さらに、中心的寄稿者が多様であることもこの企業誌の広がりを見せていると考えられる。以下に時代区分し、解説を行なう(図2)

■第Ⅰ期：1960年～1964年

この時期は、特集「日本の窓 近代」¹⁰や連載「GLASS SCIENCE」があった。これらは、ガラスという材料を建築の中でどのように展開していくかという事に主題があったという点で共通する。また、特集「メキシコ


西暦	区分	連載	特集	関連事項	
1960	第Ⅰ期				
1961					
1962		・「建築家の随想」	・「東京」/「超高层建築」/「サスペンション構造」	・創刊(1月)	・創刊号表紙 ・1965年16号号表紙
1963		・「ニュースフロント」	・「超高层」/「道路」/「カーテンウォール」		
1964		・「建築の工業生産化と八幡MONO-H構法」	・「木造のジョイント」		
1965		・(超高层)14号			
1966	第Ⅱ期			・1966年19号号表紙 ・1968年27号号表紙	
1967		・「低及び中サイクル垂床労働について」/「平行線ケーブルの架設実験」			
1968					
1969	・「日本ビルB棟(仮称)の構造概要」				
1970	第Ⅲ期			・新日本製鐵になる	
1971			・(超高层)42号	・1969年48号号表紙 ・1972年43号号表紙	
1972		・「都市住宅計画の展望」			
1973					
1974		・「工業化工法による戸塚浜高層住宅プロジェクト提案競技第1位入選案ASTM」/「非線形振動解析の一提案」			
1975	・「新日本製鐵における建築分野のコンピュータ・システム」				

図1:『カラム』時代区分

建築の近況」¹¹に象徴されるように、古代から現代にかけて食文化もふまえた文明の流れを提示した上で、メキシコの建築について論じている。ある対象を論じる前に、その周辺部分もふまえて歴史的に本質を探らうとする編集方針は4つの時期すべてに共通する。

■第Ⅱ期：1965年～1968年

ガラスが建築分野でなく、車窓などで使用された事をうけ建築以外の分野で、材料としての可能性を探る時期であった。また、この時期の特集である「ガラスの器 古代」¹²「ガラスの器 中近代」¹³「スタンドグラス」¹⁴で、懐古的にガラスを扱っている。ガラスの新たな可能性を考えるために、本質的な要素を歴史的見地から模索するという編集方針にも関係していると考えられる。

■第Ⅲ期：1969年～1971年

特集「珈琲空間」¹⁵や連載「環境エレメント」¹⁶に見られるように、都市の中でのガラスの広がりを見せている時代である。超高層時代に、他の建築雑誌が霞ヶ関ビルを特集するなか、同時期に田園都市に建設された第一生命ビルを取り上げ「自然のなかで文明のヒューマニゼーションという現代的課題に取り組んでいる」¹⁷ものとして扱っている。ここでも人を起点とした編集方針が確認できた。

■第Ⅳ期：1972年～1975年

目次構成の変更が確認できた時代である。「我々の環境があまりにも機能性や経済性の考えからつくられすぎている」とした上で、「人間の生き得る環境としての文化性、精神性」を取り戻す為に、原エレメントに回帰し建築や都市、さらにはその他モノづくりに携わるすべての人々を含めた環境を扱っている。

4. 『a/a』『a+a』『アルミニウム建築』について

4-1 雑誌概要

雑誌『a/a』は、軽金属協会によって発刊されていた月刊の建築雑誌で、a/a編集実行委員会が編集を手がけていた。雑誌名が二度変更され、1964年8月号から『a+a』、1970年6月から『アルミニウム建築』となった。本誌は、1963年8月から1975年3月まで計136号が刊行された。なお、1967年の9月10月号、1968年の9月10月号、1972年の7月8月号は合併号で1974年8月号は休刊である。

中心的寄稿者としては、研究者が多い事が判明した。研究者の専門分野については、材料工学や都市工学など偏りはなかった。また、大手ゼネコンの寄稿が多いのは、雑誌後期に事例紹介をもとに誌面構成されている性格が表れている

4-2 創刊の経緯

1973年当時の会長である中山一郎氏によれば、創刊の経緯はアルミニウムという材料が優れた特性を示す

西暦	区分	連載	特集	関連事項
1960	第Ⅰ期	・「ガラスの構成」/「板ガラス研究レポート」/「製品紹介」/「VISTA」		・創刊(1月) ・二川幸夫氏による表紙写真 ・創刊号表紙 ・1962年11号表紙   ・1965年21号号表紙 ・1968年303号表紙  
1961			・「日本の窓 近代」	
1962		・「GRASS SCIENCE」	・「メキシコ建築の近況」	
1963				
1964			・「把手」	
1965	第Ⅱ期		・「ニューヨーク」	・1969年35号表紙 ・1970年38号表紙  
1966			・「ガラス器」/「<鉄道車両の窓>客車の側窓・日本・1872-1966」/「メトロポリスへのみごとな出発―都心から脱出する第一生命本社」/「スタンドグラス」	
1967			・「都市・ガラス・人間」/「トランスポートーション」	
1968				
1969	第Ⅲ期	・「視界」	・「フロントグラス」/「建築複合現象とガラス」/「東京の景観」/「都市に棲む」	・監修: 吉阪隆正、波多江健郎 ・1971年41号表紙 ・1974年45号表紙  
1970		・「視界」	・「珈琲空間」/「システムとガタ」	
1971			・「北アメリカのファサード」/「大阪の開発」/「緑」	
1972	第Ⅳ期		・「土」/「水」	
1973			・「火」	
1974			・「空」	
1975				

図2: 『SPACE MODULATOR』時代区分

ものという認識が最初にあった事が分かる。¹⁸そして、そういった業界内の期待とアルミニウムが実際に使われる現場の状況との差に問題意識をおいていたと考えられる。

4-3 雑誌の体裁について

1964年3月から「ディテール・デザイン」という連載が始まる。1964年6月から「エレメント・デザイン」と名を改めるが、内容についての変化はみられない。この連載で扱われるテーマは、柱や天井など建築の構成要素を取り上げたものであるが、ここで扱われるテーマが特集と一致しているものや他の論考がそのテーマに偏っている事が確認できる。つまり、この時期では少なくともこの連載が特集的な扱われ方をしていたと言える。

目次でその号の特集の記載が見られなくなった時期と連載が始まった時期が重なり、さらに連載が特集的な扱いを受けていることが明らかになった。したがって、特集の役割が連載にとって代わられた時期として1964年を捉えることができる。

4-4 連載について

1964年8月から連載「技術論の展開」¹⁹がはじまる。雑誌初期の連載で、技術に関する思想的内容を扱ったものである。ラジオやテレビなど新技術が人々の生活に豊かさを与えた高度経済成長期において、期待感や憧れとともに語られる技術のもつ力に警鐘をならす。技術者に対して慎重な姿勢をとるべきであると主張する連載が確認できた。他にもアルミの関連で建築と他

分野を横断的に扱う「建築とアルミニウムの周辺」や有名建築家の影に隠れやすかった若手を対象にした「若い建築家の発言」など、当時の建築雑誌ではあまりみられない性格の連載も確認できた。

4-5 特集について

全体の傾向としては、アルミ業界の動向を忠実に特集という形でたどるという編集方針が伺える。まず、アルミという材が比較的早い段階でサッシやカーテンウォールという部分で建築物に使用されていたという事に関係した特集が確認できる。それが、ビルや店舗という別のビルディングタイプで展開される。建築物で使用される範囲が限定的であった事から、アルミニウムという材料の性質を追究するという流れが確認できる。表面処理やカラーアルミなどが特集として扱われたのもこのような文脈によるものであると推察される。しかし、53号などで確認できた特集²⁰では、工業化に対する不安も確認でき、安価に建材を生産する事に疑問を呈す姿勢も伺えた。建築物の表層部分で使用される事を意識した論考もみられ、商業的な側面で捉えられている建材会社とは異なる思想が確認できた。

4-6 雑誌の時代区分

アルミの高価なイメージによって、メーカー側の期待とは裏腹に建築現場で使用される場面は限定的であった。この事が本誌の創刊経緯に関係していると考えられた。以下に時代区分し、解説を行なう(図3)

■ 第Ⅰ期：1963年～1964年

この時期は、住宅サッシ及びビル用サッシ、カーテ

西暦	区分	連載	特集	関連事項
1960				
1961				
1962				
1963	第Ⅰ期		「ファサード」「マスプロダクションと建築」「移動間仕切」「カーテンウォール」「鞋金庫」	・創刊(8月)
1964		・「技術論の展開」「接合方法論」「ディテール・デザイン」 /「a ディテール」「建築のマテリアル」「設計の技術と道具」「図面の表現」	「手摺」「階段」「柱」	・『a+a』に雑誌名変更(8月)
1965	第Ⅱ期	「アルミニウム技術データ」「建築・技術・アルミニウム」「建築・技術・アルミニウム」		
1966		「外壁」	「万国パビリオン建築設計競技入賞作品」 「住宅用アルミサッシ」「富士銀行本店」	・1965年3月号表紙
1967			「アルミニウムによる外装デザインの展開」 「アルミニウムファサード将来の展望」	
1968		「トランスポートーション」	「現代建築におけるメタルウォールの可能性」/アルミニウムと現代の造形意識」「トランスポートーション」 「都市・建築・交通」	
1969		「空間構成の技法」		
1970		「全鋼プレハブシリーズ」「全鋼造プレハブ建築文献紹介」	「万国博」	・『アルミニウム建築』に雑誌名変更(6月)
1971		「若い建築家の発言」/「建築とアルミニウムの周辺」 「歴史シリーズ」/「OPERATION BREAKTHROUGH 調査報告と問題点」		・1971年6月号表紙
1972		「都市再開発」「技術資料」「アルミ加工技術」	「店舗」	・廃刊号表紙
1973		「わたしの発言」	「カラーアルミ」「複合材料」「表面処理」 「建築と船と航空機」/「都市再開発と超層層」/「住宅の工業」 「沖繩」/「最高裁判所」/「高層住宅建築工法」 化」/「エキスポ/デザイン」/「カーテンウォールディテール」	
1974		「AA Report」		
1975		「アルミシステム住宅」/「音と建築」	・廃刊(3月)	

図3:『a/a』時代区分

ンウォールと建築における技術展開をある程度終えた。比較的早い段階で、建築界に技術を提供するという役割をはたした。当時まだ、材料として高価なものであったため、安価に製造するための技術が中心に語られる。製造技術として鋳造から押し型へ転換する。

■第Ⅱ期：1965年～1975年

この時期は、アルミニウムの合金化や表面加工など、雑誌の中であつかわれる技術の対象が細部の話になる。これは、雑誌の中で扱われる技術が形骸化したことではなく。アルミニウムが建物の外壁や屋根など、人目にふれる場所で展開されていた事に関係している。表面的な話が中心的となり、雑誌の中では事例紹介としてファサード写真中心の構成となる。

5. 結論

本論文において導かれた三誌の特徴の違いを比較することで、企業誌として当時の建築界に与えた影響について考察という形で示し、本論文の結論とする。

三誌の共通点として二つの事が確認できた。一つ目は、既往研究で語られるような自社製品を宣伝するという側面である。しかし、これは雑誌の後半部分で扱われており、全面的に広告するというものではなかった。二つ目は、技術を理想的に語る点である。多くの新技術が開発された時代に、単なる技術の紹介ではなく建築や都市の中でどのように技術が取り込まれていたのかという部分まで扱っていた。この際、可能性を交えて理想的に技術を語る傾向が確認できた。これらの共通点は、大きく企業誌の特徴を示していると考えられる。

三誌の相違点の一つ目は、当時の建築界のどこに問題意識をおいていたのかという点が挙げられる。『カラム』は、技術が高度化・細分化した事で、技術者が技術の総体を把握する事が困難となっていた事に懸念した。そして、専門家同士をつなげる意味での「広場」としての役割をこの雑誌に与えたのではないだろうか。

『SPACE MODULATOR』は、技術革新を行なうこと自体が目的化している点に問題意識をおいていた。技術が手段である事を強調した上で、目的はあくまで人間環境をいかに形成するのかという点にあると主張し、この事を一般大衆も含めて自覚すべきであると語っている。一般大衆に対して技術の有り様を啓蒙するという姿勢が、現在も刊行が続く一要因ではないかと推測できる。

『a/a』は、技術のもつ力に自覚的になるべきであると技術者に対して主張した。社会を変容させるものとして技術を捉えたのは、技術によって社会が変容した時代性の反映と推察される。また、アルミの製造過程が工業化される事に不安を示しており、工業化を必ずしも肯定的に捉えていない事が明らかとなった。

そして、二つ目の相違点は各企業が扱っていた建材の建築への関わり方によって生じたものであると考えられる。鉄鋼は、土木及び建築の主要構造部として使用されていた。この事が、技術を実験的に検証し様々な専門家の目にさらすという『カラム』の編集方針に関係していると言えよう。

また、ガラスが建築分野で活用されるよりも前に、ガラス器などの工芸製品として身近な存在であったことから、人々の生活の中でガラスがどのような広がりをみせるかに主題があったのが『SPACE MODULATOR』であった。これは、人を起点として誌名が決められた事にも関係し、時代区分の根拠にもなっていた。

『a/a』は、アルミニウムがサッシやカーテンウォールなど建築物の表層部分で活用されていた事から、建築物の印象に直接関わるという使命感が確認できた。そのためヴィジュアルイメージを多用した雑誌構成になったと考えられた。

PR的な側面だけで語られる企業誌であるが、当時の建築界に技術に関する問題を提起していたものとしてとられることができよう。

企業誌をみていくことで、建材会社を単なる技術の提供者ではなく、技術思想をもつ存在として捉えることができた。

註

¹ 菊岡 俱也「明治・大正・昭和にみる建築・都市・住宅関係雑誌の変遷（建築ジャーナリズム）」建築雑誌 92巻 1129号（昭和52年11月号）

² 小島新一「ご挨拶『カラム』1962年 1号

³ 「建築の工業生産化と八幡 MONO-H 構法」『カラム』15号-19号（1965年-1966年）

⁴ 『カラム』の特集は、雑誌の背表紙に記載されている。閲覧できた資料の状態などからすべてを確認する事はできなかったが、3号及び6号で「超高層」というテーマが重複している事が判明した。一年以内に同じテーマで特集を組んでいる事から、少なくとも1960年代前半の鉄鋼業界においては重要なテーマであったと考えられる。そこで、14号及び42号においても同様の偏りが確認できたため特集としてこれらを扱った。

⁵ ワルター・グロピウス「日本建築の成果は最上の現代的感覚と最善の日本的感覚の上に立っている」『カラム』1962年 1号

⁶ 「おわりに」『SPACE MODULATOR』1964年 16号

⁷ 「製品紹介」『SPACE MODULATOR』1960年 1号-1968年 32号

⁸ 「GLASS SCIENCE」『SPACE MODULATOR』1962年 9号-1964年 17号

⁹ 剣持勇「建築に共鳴するクラフト」『SPACE MODULATOR』1964年 17号

¹⁰ 『SPACE MODULATOR』1961年 6号

¹¹ 同上 1962年 11号

¹² 同上 1965年 21号

¹³ 同上 1967年 23号

¹⁴ 同上 1967年 28号

¹⁵ 同上 1970年 37号

¹⁶ 『SPACE MODULATOR』1969年 35号-1970年 38号

¹⁷ 浜口隆一「文明のヒューマニゼーション」『SPACE MODULATOR』1967年 27号

¹⁸ 中山一郎「創刊10周年を迎えて」『アルミニウム建築』1973年10月号

¹⁹ 『a+a』1964年 8月号-1965年 7月

²⁰ 井口洋佑「現代建築におけるメタルウォールの可能性」『a+a』1968年 1月号

討議

討議 [吉中准教授]

『カラム』は、学生時代の研究室においてあり、読んだ経験があります。今回、対象にしている雑誌は他に『SPACE MODULATOR』や『a/a』となっていますが、これらの雑誌の読者層を教えてください。

回答

『カラム』は、基本的には構造について書かれており、研究者向けの雑誌と言えらると思います。『SPACE MODULATOR』は、その逆で一般大衆にも分かりやすい形で編集されています。これは、編集後記にも記載されています。『a/a』に関しては、これらちょうど中間のようなものだと考えます。

討議 [吉中准教授]

例えば、『カラム』については、どのような形で販売されていたのでしょうか。

回答

雑誌の中に、雑誌の注文書みたいなものが入っていて、読みたい人が企業に注文するという形で流通していたと思います。

討議 [吉中准教授]

構造研究者以外に、建築デザイナーみたいな人はよんでいたんですか。

回答

『カラム』に関しては、内容が構造の専門的な話が中心なので設計者に向けたものだとはいえにくいと思います。『a/a』は、後半ではアルミの事例紹介が中心になります。現在の商業的な建築雑誌のような性格になっており、設計者に対しても意識されています。

討議 [宮本教授]

大学在学中に内田祥哉さんの授業で、『カラム』を読むように勧められました。技術者とデザイナーの架け橋の様な雑誌だったと記憶しています。内田さんは、構造や構法などもやられていて、そのような人がみていた雑誌だと思います。

回答

その事に関連してなんですが、『カラム』の初期の時代区分では、超高層に関する技術が記載されていました。ここでは技術が理想を交えて書かれていて、その意味では、構造以外の分野の専門家が読んでも

面白いと思います。あと、この雑誌は創刊号のはじめにグロピウスの論考があります。その中では、この雑誌の趣旨が「構造設計者だけでなく、設計者や施工者をつなぐため」とありました。

討議 [倉方准教授]

この三誌をみたときに、現在の建築雑誌に対してどのあたりに優位性があるのか。また、どこがおもしろいのか。

回答

企業誌のおもしろい部分は、例えばアルミという建材を起点として書かれていることです。アルミは、建築以外にも、輸送機間やインテリアの分野でも使用されていました。一般的な建築雑誌が建築の枠で書かれているのに対し、これは異分野の事が同じ雑誌内で書かれており、それを横断的にみる事ができる点が企業誌の優位性だと思います。